

月刊

2012

2
月号

みんぱく



特集 座談会

東日本大震災を 考える

増登別

息を呑む風景に出合ったことがある。と言っても何の変哲もない風景だったが……。もう三〇年も前の秋の京都府丹後半島のことだ。海岸部から山に分け入り、曲りくねった道を車で走っていると、ふいに山間に黄金色の稲穂が実った小さな田圃があらわれた。思わず車を止め、しばし風にそよぐ稲穂に眺め入った。これも三〇年も前のことだが、三陸沿岸の旅では、気仙沼湾や大船渡湾で、海面一杯にカキイカダやワカメ、コンブ養殖のプラスチックの浮玉が浮かぶ風景に出合った。青い海にイカダや浮玉が映えて、いつまで眺めていても飽きなかった。

「日本の自然に人の手が加わっていないものはない」と説いたのは、民俗学者宮本常一である。彼の持論は「風景は民衆が作り、作り上げられたもの」であり、「その風景こそが人の心を豊かにしてくれる」というものであった。実際、名所でもない丹後半島の山中の道端に私が思わず車を止めたのも、三陸の湾一面を彩る養殖風景に立ち止ったのも、人が作り出したそれらの風景のどこかに温もりや豊かさを感じたからであらう。

ダム建設により昭和六〇年に離村した新潟県の山間の集落、二面の栗の樹林も印象に残った。三面集落の

プロフィール
1945年大分県生まれ。漁業漁場研究者。日本の農山漁村を歩いた後、発展途上国の漁村振興計画調査に従事。周防大島（すおうおおしま）文化交流センター参与等も務めた。この間、宮本常一が主催した月刊誌『あるくみる ぎく』の執筆・編集をおこなうほか、『舟と港のある風景』（農文協）などの著作を発表。現在は同誌を地域別、テーマ別に再編集した『あるくみる ぎく 双書 宮本常一とあるいた昭和の日本』全25巻（農文協）の編纂に携わっている。



民衆が作りたる風景

もりもと たかし
森本孝

川向かいの山麓に広がる栗林は、村人が長年かけて天然の森から雑木を引き抜き栗林に作りかえてきたものだった。栗の木の下の雑草は、はじけて落ちた栗の実が草むらに紛れないように払われていた。天然と思われた栗林が実は村人が手を加えて作り上げた自然だったのである。

しかし最近の日本の山野は種々の理由でその荒廃が著しく目立つようになった。昭和三〇年、四〇年代には根菜類や雑穀、柑橘類が彩っていた瀬戸内の島々も、今は雑草や竹林に覆われつつある。そこには美しさも豊かさも感じられない。このままでは、日本人は自然と向き合う心や生き方、その技術を失ってしまうのではないか、少しばかり心配になる。福島から八戸までの東北日本の太平洋沿岸で実に多くの人命を奪い、人々の生産・生活の場であった沿岸を破壊した三・一一の大津波が、こうした風景の荒廃に拍車をかけることが懸念された。だが震災後の六月下旬に三陸を訪ねてみると、岩手県の山田町の海にはすでにカキ養殖のイカダが浮かび、宮古市重茂半島の浦でも海藻養殖の準備に勤しむ人々の姿があった。自然と向き合い生きてきた人々だからこそ、自然を作り出していく能力が秘められているのだと思えた。

月刊
みんぱく
2月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
民衆が作りたる風景 森本孝</p> <p>2 特集 座談会 東日本大震災を考える
出席者 川島 秀一
北原 糸子
林 勲男
中牧 弘允</p> <p>10 研究フォーラム
グローバルゼーションと南アジア芸能の実践者たち
松川 恭子</p> <p>12 みんなく Information
地球ミュージアム紀行</p> <p>14 レジスタンスたちの記憶を伝える
リヨン市立レジスタンス・強制移送史センター
福島 勲</p> <p>15 みんなく私の逸品
タッチカーピング(トキ)
広瀬 浩二郎</p> | <p>16 散策と思索の径
ネパール、シェルパの民家で仏画と出会う
小林 繁樹</p> <p>18 多文化をあきなう
Labo Love Japon ~厨房から愛をこめて~
松谷 治代</p> <p>20 歳時世相篇
春の到来
陳 天璽</p> <p>22 フィールドで考える
スワヒリ語をしゃべる人びと
鈴木 英明</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

特集◎座談会

東日本大震災を 考える

東日本大震災の発生から間もなく一年が経過しようとしている。
被災者による懸命な努力が続くなか、災害発生直後の人道支援、
そしてインフラ等の復旧活動には、多くの人びとの力が寄せられてきた。
しかし、恒久的な住宅の建設や雇用確保など日常生活の再建、
さらに、再びやってくる災害を減じるための備えなど、
真の復興へむけた取り組みは、はじまったばかりであり、その道のりは長い。
本号では、歴史学、民俗学そして社会人類学を専門とする研究者による座談をとおして、
復興を目指す被災地・被災者にどのようにかかわることができるのか、
長期的な視野で考えてみたい。



座談会出席者

川島 秀一
リアス・アーク美術館副館長
北原 糸子
立命館大学歴史都市防災研究センター教授
林 勲男
民博 民族社会研究部

コーディネーター
中牧 弘允
民博 民族文化研究部、本誌編集委員

生活者の視点にたつ

中牧 林さんは、もともとオセアニア地域の社会人類学が専門ですが、現在は災害人類学にも力をいれていて、さまざまな被災地とかかわりをおもちです。きっかけはどういうことだったんですか。

林 研究というかたちで災害とかかわるようになったのは、一九九八年、長年調査していたパプアニューギニアでの津波災害が最初です。それ以前から、防災の専門家が中心になって被災地の復旧・復興に関する研究はされていましたが、パプアニューギニアのようにインフラの発達がまだまだのところでは災害がおこったとき、建物や構造物でなく、人の暮らしそのものがどう影響を受けて、どのように再建され、被災地が復興していくのか調べてほしいという依頼を受けたのです。それをはじめめるなかで、阪神・淡路大震災を研究されている方、町づくり・地域づくりをがんばっている方と一緒に活動するようになって、その後、二〇〇四年におきた新潟県中越地震など、さまざまな地域における災害にもかわるようになってきました。

中牧 今、インフラの整備と被害との関係が指摘されました。インフラや政府の役割という点で、北原さんが専門とされている安政年間の日本はどうだったのでしょうか。

北原 一八五三年の六月にペリーが浦賀沖にあらわれました。ロシアのプチャーチンが下田にやってきて交渉をはじめるのは一八五四年の一月三日で、その翌日に安政東海地震がおこり彼の船も遭難します。その二日後には安政南海地震がおこりました。そして翌年が、安政の大地震です。大災

害が連続して発生していたのです。当時の幕府にとっては外交国防政策が重要で、災害復興に力をそそぐ余裕はなかったようです。海岸防衛のためのお台場づくりが優先で、お金もそちらにそがれています。当時のインフラということになると、階層ごとでバラツキがありました。表通りには立派な土蔵やお屋敷が並んでいます。裏にまわると、大勢の人がせまいところにつめこまれるように暮らしていて、そこでの被害は大きかったのです。たとえば、大名屋敷が倒壊して火事がおこると、そこから逃げられない人は、武士ではなくじつは百姓が多いんです。領地から下働きに来ていた、大名や武士が死んでいるわけではないのです。

中牧 今回の大震災では、日本は堤防の建設などインフラ面で最先端地域であったにもかかわらず津波で大きな被害ができています。川島さんは、ご自身も気仙沼にお住まいで、これまで、三陸沿岸の漁村の調査を続けられているわけですが、実際の状況はどうだったんでしょうか。

川島 三陸はむかしから「津波常襲地」といわれていて、いつかは来ると覚悟していました。最近はおわたりもこの「常襲地」ということを意識的に使って、三陸沿岸を見えています。そうすると、今までわからなかった三陸の生活文化が見えてきます。

北原 三陸では安政三年、一八五六年に地震があつて、津波被害がでています。その後の明治三陸津波が一八九六年、昭和三陸津波が一九三三年、十勝沖地震が一九六八年、そして今回の大津波ということはおよそ四〇年の間隔で繰り返されていて、常襲地という表現もうなずけますね。

川島 五〇年に一度は間違いなく来る。きつと今後五〇年のあいだにも一回は来るでしょうね。しかし、あれだけ大きいものが来るとは予想外でした。震災前のインフラという点では、おそらく都市部、漁政部、漁村部のあいだであまり差がなかったと思います。ただ、震災後の漁村部の復興はすぐ遅れている。瓦礫の撤去からしても差ができています。これは平成の市町村合併の弊害ではないかと考えています。これがもし現在のように大きくなった市単位ではなくて、暮らしに密着した町や村単位であれば、小さな漁村に対しても、もつときめ細やかに復興の手だてもできたんじゃないでしょうか。

北原 それはわたしも感じました。岩手県に田老町というところがあります。「津波防災の町宣言」をしたりして有名なところだったのですが、二〇〇五年に宮古市に編入されました。今回の震災では、宮古市の本部で復興策を決めるので、合併以前の田老町役場の職員たちは、避難所の運営など救援の仕事に従事することになったそうです。復興に関する根本策は宮古市全体の調整でおこなわれていて、田老町独自というわけではないようです。以前田老町にいったときは、津波防災の先進地として町の人たちは誇りをもっていましたが、今回は被害も大きいし、以前とはかなり様子が違うという感じがしました。

川島 漁村部の復興の遅れという点に関連すると、宮城県では、一四二あるといわれる漁港のうち六〇カ所を拠点化し、優先的に復興させるという施策がだされました。これはまさしく漁港と漁村を別扱いにするということです。ここでいう漁港は「水揚げ」を主にすることで海産物の流通

基地ともいえるところ。一方、漁村というのは「水揚げ」はべつのところ。魚を捕る」ことを主としているところ。べつの言い方をすると、魚を捕る人たちが生活を営んでいるところ。その漁村では、津波で船は流されてしまうし、村の港は整備されないし、自分たちで細々とやっていくしかないのです。

中牧 そういう行政のつける優先順位が地域コミュニティにあたる弊害などについて林さんは、どう見えていますか。

林 市町村合併の弊害については、わたし自身も四月に被災地に入ったときに感じていました。災害直後に必要なのは町単位での対応です。それがある被災地についてみると、中心部から離れた地域からは情報が入ってこないし、情報をとりにいこうともしないという状況が続いていました。行政単位が大きくなっていくと、職員は何年かごとに担当地域が変わります。担当者が地域のことをよくわかっていないので、具体的にどうい対応をしたらよいかわからない。結果として中心部に人的・財政的に集中してしまっ、周辺部はどうしても先送りになってしまっという、同じような状況が、多くの地域でおきているんだと思いますね。

中牧 自治体は、高台移住や水産業の復興特区という構想をだしています。漁業の復興もさることながら、生活者としての漁民がなを希望しているか、どういうふうに対応して活路をみいだしているかとしているか。そうした声がかなかあがっていかないもどかしさみたいなものがあるのではないのでしょうか。

川島 トップダウンで決めることが問題ですね。漁師さんが話し合って決めるならよいのですが、外部

川島 昭和三陸津波のあとに入ったのが山口弥一郎です。彼の場合も『津浪と村』という著書のなかで、津波と直接に関係ない漁労習俗について、多くのページをさいています。おそらく彼には、津波からの復興というの、それ以前からあった生活文化をベースにしなければありえないんだという考えがあっ、民俗調査のような報告書をいれこんでいるんだと思います。

中牧 高台移転という施策において、どうしても浜においてくる漁民たちの気持ち、そのあたりをどう考えるかというのは、大切なポイントだと思いますね。

川島 経済的な問題だけでなく、精神的な問題もあります。漁師というのは、毎日「板子一枚下は地獄」の世界で生きているんだから、ある程度リスクを背負って生きています。その最大のリスクが津波なんです、海の近くにおいてくるのは当然だと思っますね。

明治三陸津波のときに高台移転したところでは、漁師さんは、まず漁具などをおいておく小屋を海岸に建て、そのあと加工する納屋を建て、それがいつのまにか住処になってしまっということが自然な流れとしておっています。わたしの家は、漁師ではなかつたんですが、もともと人が住むところではないところに、工場が建っ、隣接する職員宿舎で両親の新婚生活がはじまっ、以来長年そこで暮らすようになって、今回津波で流されてしまっったという具合です。子どものころは、海が埋め立てられ、工場や町ができていくことが、ひとつの発展だとい感覚しなかつた。ただ、その埋め立てたところが今回全部流されたわけです。

北原 工学系の研究者は、防潮堤の外に家を建て

の人が設計図をもつてきて、住民は高台へ、船はひと所に集中させるといつています。効率論だけで進められると、生活文化みたいなものがなくなるという危惧を感じています。拙速に海と人を切り離すようなことはしないで、もう少しゆつたり構えてプランをたてていくべきだと思っています。

漁師さん自ら行動しはじめたところもあります。たとえば、岩手県の重茂（宮古市）では、船をながされたので、一艘に二、三人がのつて共同で漁をするシステムにかえたところもあります。もともとこの地域では、本家格の旧家が、村人を網子にして経営する集団漁みたいなものがきつちり残っっていたところなんです。最近、船さえもれば漁師になれる時代になって、個人で競争するようになっていたんです。それが震災を受けて、元の形にすぐに戻ったんだと思っました。

林 二〇〇四年にスマトラ沖で地震がおこっ、スリランカやインドの南東部など、沿岸の広い範囲が津波でやられました。その際も、世界じゅうから支援がよせられましたが、そのなかには、漁師だから漁船さえあれば生業が復活できるだろうという単純な考えから漁師に漁船を寄贈するというのがありました。しかし、漁業というのは、それぞれの地域でシステムが異なります。スリランカやインドあたりは岩手とおなじく、網元と網子のような関係があるわけです。このことを考慮し

記憶の要

中牧 今回の震災は、「未曾有」というようなことばがよくつかわれていますが、歴史に学ぶという点で注目されているのが「津波碑」ですね。こうしたモニメントは、防災に役立つと同時に記録する装置であるなどいろいろな要素をはらんだものではないでしょうか。

北原 明治の津波碑は、建立された時期がバラバラです。それは、何周忌など、死者の供養碑というかたちになっていっるものが多いためです。しかも、二〇年、三〇年たつてから建てているといっるのは、死者・行方不明者の搜索はここで区切りをつけようといっ意味が含まれていったのではないかと思っます。死者・行方不明者が約二万人で、そのうち八〇〇〇人くらいは遺体も見つからないといっ状態だつたんですね。そういうことからすると、村の復興を考えたときに心の転



北原 糸子
立命館大学歴史都市防災研究センター教授
専門：歴史学
幕末期の江戸で多く出回った鯉絵を目にし、災害史に関心をもつようになる。近年は関東大震災の資料収集・データベース化などを通して、都市復興過程に関する研究をすすめている。著作に『地震の社会史——安政大地震と民衆』（講談社学術文庫）、『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版）など。

ない支援がおこなわれると、災害まであつた漁業をめぐる社会関係といっものを、解体させてしまっことになりまっ。

北原 遠野市出身の山奈宗真は明治三陸津波がおこると、その一カ月後に三陸を調査してまっ。彼が一番感じたことは、三陸海岸に暮らす漁民の生活をどうするのかでした。当時の支援は地租に應じておこなわれていて、その基準となる地租が当時の岩手県は低かつたのです。もともと災害法は農民救済が基本になっていて、漁民への対応はほとんど頭になかつたのです。しかし、彼は漁民の救済こそ復興の基本だと考えて、漁民の暮らしを徹底的に調べたんです。その資料の大部分は国立国会図書館に残されています。そこには、被災状況とともに、漁労習俗のような項目があつて、ここではどういっ漁業をおこなっているかといっことがきちんと記されています。津波調査なのに、そういうことを調べるといっことは、三陸に暮らす人をどうやって救うかといっことを、彼は一番に考えたのだと思っます。

換を自らがはかるために、供養碑をつくるということがあつたんじゃないかと思っます。一方、昭和の場合は、新聞社が義援金の一部をつかっ「これ、津波に対する警句をきさんだ記念碑を建ててください」といっことになっていったようです。

川島 供養碑の場合はあくまで過去に目を向けているんですが、記念碑といっのは標語なんかも含めて、これからのことを考えて建てている。そこに大きな違いがあります。ある釜石のお寺にも記念碑が建っているんですが、標語ではなくて「大津浪くぐりてめげぬ 雄心もて いざ追い進み 参り上らまし」と歌詞をきさんでいます。地元の人に尋ねてみたら、以前は三月三日に小学校の講堂に集められて、「津波の歌」といっのを歌わされたそうです。それが昭和一七、八年くらいま

明治の津波供養塔 岩手県大槌町吉里吉里（おおつちちょうきりきり）



では続いたようですが、戦争がひどくなって、結局この昭和八年の津波は、太平洋戦争で上書きされてしまつて、忘れ去られてしまつたんだと思います。

林 道路工事などで、そこにあることに意味があった物がうつされてしまつたということも結構あつたらしいですね。津波碑の調査は、東北大学が中心となつてまとめたものがウェブ上に公開されていますが、現在は岩手県立博物館の若手の研究者が、さらに調査を進めています。それを受けてわたしたちは、地図に落として正確な場所を調べようということをはじめていきます。ゆくゆくはそれらを統合して、データベースづくりをしていこうと思っています。もうひとつ、記憶をこれから何世代にもわたつて地元の人びとの生活のなかにとりこんでいくために、陸前高田では「桜ライン3-1」といって、桜の木を津波の到達点に植えていくというごきがあります。桜は生き物ですから、その成長過程というものを地元の人たちが見守つていくし、開花する季節になれば集つて思い出を語るなどする。やはり年に一回にしろ、津波と関係するところに集うことで、記憶が継承されやすいのかなという気がしています。高田だけでなく、三陸沿岸に広げていく活動も検討されていると聞いています。



昭和8年の「津波の歌（復興の歌）」を刻んだ記念碑
岩手県釜石市唐丹小白浜（とうにこじらはま）

北原 調査していると、津波碑の存在に「はじめて気づいた」という地元の人が結構います。忠魂碑などと一緒にお寺さんに建つていたり、文字もかすれて読みにくくもなつていたりするんだと思います。それに戦争やいろいろな事件があつて忘れられていく。昭和三陸津波の場合ですでに七八年前ですから、二世代くらいはすぎています。それでは風化してしまいます。

川島 和歌山県の湯浅の近くに「稲むらの火」で有名な広村（現・広川町）があります。「津波まつり」というのを毎年ひらいています。濱口梧陵がつくつた防潮堤があるのですが、小学六年生と中学三年生が土をもつて土手に盛り上げていく行事があるんです。現在では、ビニール袋に土をいれてもつていくだけの儀礼的なものになつたんですが、むかしはちゃんと天秤で土をはこんであげていたという。

て、心のケアも含めて、さまざまな支援体制の構築が必要です。政府や専門家に対して正確な情報開示をもとめるとともに、被災者だけでなく、原発をかかえる日本に暮らす人びとが、今後どういうふうに生きていくのかということも考えていかなければなりません。

中牧 災害後には、亡くなった人、生き残つた人、それに外部からかわる人などによるあらたな関係や社会状況が生まれるのだと思います。江戸時代の記録のなかにも、示唆をあたえてくれるものがあるのではないのでしょうか。



川島 秀一
リアス・アーク美術館副館長
専門：民俗学
東北地方の民間信仰やシャーマニズム、漁村の民俗調査等をおこなう。東日本大震災以降は、地域の自然とともに育んできた人びとの歴史や暮らしのあり方を紹介し、被災者に寄り添った生活再建の手がかりを得るべく発信している。著作に「漁撈伝承」「追込漁」（以上、法政大学出版局）など。

そういう行為をともなうことを毎年、しかも「津波まつり」ということばをつかつて続けているということとは、記憶の要みたいなものになりますね。

林 行為をともなうと、伝達力や継続性もたかまつていくように感じます。震災前のはなしですが、大船渡市の綾里小学校の前校長先生は、昭和の津波災害を題材にした演劇と歌をつくつて子どもたちに教えて、町の人に伝えたりべつこの地方にいったときに披露させたりしていました。ただしこうした試みは熱心な個人に依存していた部分が大きく、なかなか継続させていくことは難しいのだらうと思っています。この震災をへてどうなるかはわかりませんが、関心あるところです。

北原 そういう取り組みを外からいった人がやりはじめても毎年かわつていけるわけではないし、これだけの災害ですから、地元の方が自発的におこなうのも、すぐには難しいかもしれません。当面は、行政からの側面的支援にたよる部分もあるんだと思います。外からいった人が、それを支えるような形で、定着するまで見守ることができればと思いますが、地域によって状況は全然ちがうので、画一的にやつてはだめですね。

災害と向合つ

林 震災発生以来、大船渡と南三陸町にある「鹿踊り」の団体へ、装束の一部である鹿の角を送るという支援をしています。民俗芸能の研究者でもなわたくしが支援をするようになったのは、鹿踊りには、死者の弔いが含まれているということを知ったのがきっかけです。今回の震災を知ったとき、阪神・淡路の被災地の様子を思い出して、肉親の

北原 安政の大地震のときの、庶民のようすをのこすものに「鯨絵」というのがあります。その画題はどんどん変化していくのですが、今、おこっていることの基本は、全部含まれていると感じています。最初は地震をおこした鯨をみんなで殴っている絵が多く、「地震がおきた原因はこいつだ」みたいな意味がこめられています。少し後になると震災景気になって、大工さんなどの好況ぶりが描かれていきます。でもそういうのは、長く続かないわけですから年明けくらいになるとしぼんできます。だから震災景気のころは、ある種のモラトリアムの期間ともいえるのではないのでしょうか。彼らはそのつもりで描いたわけではないでしょうが、鯨絵は、災害後の社会の普遍的なありようというか、過程をあらわしているようにも思いますね。

川島 震災直後、町のなかには、へんな明るさがありました。たとえば道路で知人とすれちがうと「よう、生きていたか」と手をあげたりしていたんです。わたしは経験したことはないんですが、終戦直後というイメージです。復興ということばもそうだけど、ならんでそばをすすっているときとか、銀行に行列ができているのを見て、戦後というのはたぶんこういうものだったんじゃないかなって、そういう印象を深く感じた覚えがあります。

北原 「よう、生きていたか」というのが何回も続けていくと、もういわなくなるそうですね。ようするに仲間がたくさん死んでいるわけでしょう。それで、自分はずっと生きていっているかと思うわけです。そうするとこれからどうしようかということと同時に、自分は生かされているんだと思うようになる。だからなんかやらなきゃならないっていう気持ちになるんだと聞きました。

川島 津波はものすごいエネルギーで町を破壊します。そのあとわれわれもそのエネルギーをもらっているような気もするんです。一種の興奮状態であるわけですから。そういうことを考えないと、明治も昭和もあんなに大きな被害にあいながら、復興していったという理由がわからないような気がします。それに、ゼロからの仕切り直しというか、リセットという感覚はありましたね。

林 震災直後の活力といった点では、岩手県の住田町たきょうというところでは、かなり早い段階で、地元の産業を復旧・復興に活用して復興を地元から広げていこうという動きがありました。具体的にいうと、気仙大工の方たちによる応急仮設住宅の建設です。彼らは、家づくりだけじゃなくて、船大工でもあり、それから祭りの山車だしなんかもつくるんですが、そうした人たちの伝統的な技術を利用しました。さらに木材は、地元産の気仙杉を使っています。住田町の町長は、国からの財政的な支援が決まる前から、自分の町で復興住宅を提供して、沿岸部の人たちを受け入れることを表明したんです。災害学や建築にかかわっているような人たちも注目しました。

見直すべきこと

中牧 リセットということばがでしたが、今回の震災では、いろんな国から多くの支援を受けています。ともすれば、我々は外国に援助をしている身だと思っていたのが、世界観が変わる、そういう意味でもリセットすることになりました。

林 震災がおくる前、日本学術会議の防災支援に関する委員会のメンバーだったのですが、そのなか特に漁師さんが「今度津波が来たときにどう逃げたらいいかわからなくなる、どうして見せなかつたのか」と抗議をしたんです。そういう漁師さんがもっている体に刻まれた知識みたいなものを、まず民俗学が今のうちにすくいだして、それをベースに復興を考えないと、これは変な方向にしかいかないなという気がしています。

あと、これは、漁師さんたちが高台移転について話し合っている現場におじゃましたときのことですが、かつて、その村では、元日に子どもたちが神社で火をたいて参拝者を招くような行事があったのですが、ある時期から途絶えていたそうです。今回の震災を受けて、そういうことも復興しようということが議論されていました。津波がすべてを流すわけではない、むかしのものを復活させるということもあるんだと思います。

林 中越地震の被災地、旧川口町かわらぎでも、災害前に途絶えていた地域の行事で復活したものがありません。それまで行政依存だった住民たちの思考が変わって、行政と住民と支援者と三者が同じ土俵の上でともに考えようという雰囲気できたときが、それを可能にした大きな転換期でした。わたし自身は、社会人類学という立場で、被災地、それとこれから災害がおくるかもしれない地域の防災に注目していますが、自然現象そのものが即災害をもたらすのではなくて、そこにさまざまな社会的・文化的な要因というものがからまって、災害の姿とか規模がきまってくると思っています。たとえば、兵庫県の佐用町さようちょうでは、過疎化がすすむ集落に若い世帯を迎えるため、町の方針で町営住宅が建設され、河川が氾濫したら水没するような水田の跡地に若い家族が数世帯暮らしていました。周辺は農



中牧 弘允
民博 民族文化研究部
本誌編集委員

での議論の大部分は、海外の途上国への支援体制ということだったんですね。まさかこれだけの震災が日本でおきることにについては、ほとんどの人たちは、それほど切迫したものと考えていなかったと思うんですね。今回の震災は、途上国への支援のあり方を見直すきっかけにもなったし、支援を与える側ではなく、支援をどう受け入れるかという点でも見方を一八〇度かえさせられたと思います。

中牧 特に原発事故について、世界から注目されています。わたしたちが、世界の不安要因になるとは夢にも思っていなかったわけです。それがじつはそうではない。これをどう考えるか、大きな課題だと思っています。

川島 福島原発事故は、純粹の自然災害ではないということだが、問題を非常にややこしくしていますね。日本列島は災害とともに生きてきたんだから、独自の自然観や災害観、文明観などを謙虚な気持ちで一から見直さなければいけないなという気がしています。いつまたこういうことが、来年でも再来年でもおきるかわからないのですから。

業に従事する高齢の方がたが住んでいるところなんです。彼らと町営住宅の住人のあいだで、地域の行事のなかで何にかかわるかという申し合わせのようなものをして、行事のすべてにかかわらなくてもいいような状況にしてしまっていたんです。そうすると日常の交流というのは限られてきます。二年前の八月にその地域を洪水がおそったとき、避難所に指定されている小学校までのあいだに、地域の区長さんたちが災害対応でつめている公民館があったんです。しかし、町営住宅から避難所に避難する人たちは、公民館が目前にあるにもかかわらず、しかもおそらくはなかに人がいることもわかっていたのに、かなり冠水している



林 勲男
民博 民族社会研究部
専門：社会人類学
世界各地において、災害と地域社会・文化との関係や、復興プロセスについて現地調査・研究をおこなう。東日本大震災発生後は、東北一帯に伝わる民族芸能「鹿踊り」の継続に不可欠な鹿角を収集するなど、支援もおこなっている。著作に『災害とともに生きる文化と教育』（昭和堂）、『自然災害と復興支援』（明石書店）など。

中牧 そういう意味では、われわれがやっている学問の意味や、これからどういうふうな取り組みができるのかについても考えなければなりません。**北原** 三沢みやまの歴史民俗資料館には、明治三陸津波の貴重な資料がのこっていて、きちんと整理されています。何故かという点、有能な官吏として知られた会津藩の人たちが、移り住んでいた下北に近くて、おそらく彼らが整理に携わったのだと思います。あれほど整った資料はほかにはありません。こういう資料が、歴史をやる身としては決定的に重要です。そういう経験もあって、歴史学者は、被災資料を保全するという取り組みを阪神・淡路以降持続的におこなっています。今回は水に浸かったものが腐敗して、霉かびがはえるという大変大きな問題がおこっていますが、保存学の専門家や、さまざまな機関と協力しながら取り組んでいます。それに、今は、ゴミみたいに思えるビラなど、ささいなものでも集めておいていただくということが基本だと思っています。

中牧 それは、歴史の復元だけではなく、次の施策や行動指針にもつながっていくわけですね。

川島 気仙沼の町を流れている川は、江戸時代に河口を南の方にかえる付け替え工事をしていたということが、享保三年の文書でわかっておりました。今回の地震では、埋められた河床を津波が入ってきたんです。防災計画をつくるときに、歴史的認識が欠如しては、まともなものをつくれないという気がしています。そして、今、もっとも危惧しているのは、人と海とのかわりを分断しようとする動きです。津波のとき、ある高台の小学校では、子どもたちに津波を見させないよう、山の方を向かせた先生がいたらいいんです。ところが子どもたちの親

道子どもを連れてすみ、公民館の前を通り過ぎてしまふんです。結局、その先の細い用水路で三世帯が流されてしまって、九名が亡くなってしまいました。原因は大雨と洪水なんです。やはり地域社会のあり方が災害を引き起こす要因のひとつになってたのだと思います。高齢化が進んでいるから平均年齢を下げるために若い人たちをいれればいいのか、入手しやすい土地を住宅地に転用すればいいというわけではない、地域のあり方をもう少し考えなければならなかったんだと思います。

いずれの災害でも、ある程度時間的な幅のなかで、社会の仕組みなどを細かく調べて、どういう要因がからみ合って、これだけの被害になったのかということを見ていくべきだと思います。復興についても、すべてが順調にすすんでいるわけではないし、さまざまな新しい問題というのがでてきますから、地域のなかで、社会、文化に注意をはらいながら総合的に見ていくことが必要です。東日本大震災に関しても、今後地元の人びとの生活設計にも多少かわりながら、研究の方に次第にシフトしていければと思います。

中牧 東日本大震災というのは、これからの日本にとっても、広く世界にとっても、大きな意味をもっていると思います。我々研究者としてはいろいろなかたちで、震災にかかわりながら、情報を集積し、支援活動につなげ、それを将来の世代につたえていかなければなりません。そういう意味でも世界とつながる研究機関として、あるいは市民に開かれた博物館として国立民族学博物館が果たすべき役割は大きいと思います。今日はどうもありがとうございました。



グローバリゼーションと南アジア芸能の実践者たち

まつかわ きょうこ
松川 恭子
奈良大学准教授

メディアの多様化は人と情報の移動を促し、文化や社会構造にまだかつてない大きな変化をもたらしている。しかし、その変化を生み出す要因は異国の情報を仕入れ、受容することのみにとどまらない。現代における伝統の継承と拡散、文化の再構築といった側面を南アジアの芸能をとおしてみたい。



ゴアの劇場前にかかげられた演劇の看板

では、南アジアの社会・文化的側面に、グローバリゼーションはどのような影響をおよぼしているのだろうか。このような問いを立て、組織されたのが、民博の共同研究「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」である。組織の中心は、南アジアにおける儀礼、演劇、舞台、音楽などの芸能研究をおこなってきた文化人類学者たちだ。南アジアの芸能は、特定のカーズト集団に担われていることが多く、宗教とのかかわり合いが深い。芸能の現在をみることで、南アジアの社会構造や世界観がグローバリゼーションの中で変わっていく様も理解できると考えたのである。

観客・鑑賞者の広がり
本研究でひとつ注目しているのは、南アジア芸能の実践者と観客・鑑賞者とのあらたな関係である。現在、南アジア芸能の観客・鑑賞者は、世界中に広がっている。その中でもっとも重要なのが在外南アジア人である。観客・鑑賞者のグローバルな拡大とともに、芸能実践者たちも南アジア地域の境界線を越える。それにもない、実践者と鑑賞者の関係も変化する。たとえば、西部インド・ゴア州の大衆劇が、アラブ首長国連邦ドバイのゴア人コミュニティのために上演される。この場合、対象となっているのはゴア出身の人びとであり、ゴア社会独自の演劇の様式が、観客とのあいだに共有されている。いつばう、欧米在住の南アジア系移民のコンサートに、インド人演奏家が招へいされる場合、そこで演奏家にとって重要なのは、移民二世・三世が自身のルーツを投影できる「南アジアらしさ」をどのように提示するかである。
更に、「南アジア」外の観客・鑑賞者による芸能の消費に対して、芸能実践者たちが従来のパフォーマンスとは異なる形で対応するケースが近年増加している。たとえば、インド北西部、ラージャスターン州の楽士集団の歌謡が、「ジプシー音楽」や「インドの伝統音楽」としてヨーロッパ

ドバイで買った「インド音楽」CD
わたしの目の前に三枚組みのCDセットがある。「インド・完全ガイド」というタイトルで、イギリスの会社が発売元である。確か二〇〇八年にアラブ首長国連邦ドバイの空港で、搭乗便を待っているあいだに購入したものだ。一枚目にはインド映画の名曲、二枚目には芸術的なアコースティック音楽が収録され、三枚目は「デシ（南アジア系）・ビートと更に……」と題され、ジャンルの枠を超えたさまざまな曲が収められている。二枚目、三枚目にはイギリスや北アメリカで活躍するインド系歌手の曲が並んでいる。たとえば、二枚目のCDの冒頭には、イギリス生まれのナジマ・アクターと、インド生まれ、カナダ育ちのキラン・アフルワリアの曲が並んでいる。二人の女性歌手が他に発表している曲を知ろうと思えば、インターネットにアクセスし、動画投稿サイトで検索すればよい。イギリスで製作された「インド音楽」のCDを日本人が湾岸諸国で購入し、聴くというこの事例は、確かに、世界のさまざまな地域が相互につながり、グローバリゼーションとよばれる地球規模の一体化現象を端的に示しているように思われる。



ロンドンにあるインド文化学校のシタール授業風景 (撮影・岡田恵美)

グローバリゼーションの社会・文化的側面
二一世紀に入ってから一〇年以上が経った現在、一九九〇年代初頭に経済自由化の方向に舵を切ったインドをはじめとする南アジア地域において、グローバリゼーションの影響がさまざまな形で顕在化している。ただ、これまでの研究は、おもに経済的・政治的側面に関心を寄せてきた。日本で報道されるのも、アメリカの電話会社のコールセンターがインドにあり、インド人従業員がアメリカなまりの英語で顧客に話す、H&Mやユニクロといったファストファッションの縫製工場がバン格拉デシユにある、といったおもに経済的なグローバル化の断片についてであることが多い。

で受容されている。彼らの音楽がCDとして販売され、ニューヨーク、パリなどの都市で大掛かりなコンサートが開催されている。コンサートの模様は、インターネットの動画投稿サイトでも閲覧可能である。メディアの影響力も、グローバリゼーションの中の南アジア芸能を考えるうえで重要な要素である。

このように、芸能実践者たちは、これまでのローカルな社会関係の枠を超えた観客・鑑賞者とのやりとりの中で、芸能を変容させている。南アジア地域においても、インド都市部の中産階級が、より「インドらしい」芸能を求めるといった嗜好の変化がみられる。幅広い観客・鑑賞者の要望を実践者たちがどのように解釈し、芸能実践として実現させているか、そして、芸能が変容していくなら、これまでの「伝統的」な技能や知識の継承はどうなるのかといった問いを、実践者たちの視点から考えていきたい。

共同研究
「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」
代表・松川恭子
2011年10月～2015年3月
第2回研究会を3月初旬に開催する予定。

「たつぷりアメリカ——春のみんぱく
フォーラム2012」

雪と氷の地、乾燥した砂漠や草原、熱帯雨林などの多様な自然。古代文明の興亡、ヨーロッパによる植民地化、アフリカやアジアからの移民などの重層的な歴史。そして、さまざまな人間と文化の出会いと交わり。アメリカの多様性と興行を味わっていただくため、イベントをたつぷり用意しました。

◆関連イベント

◆「みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
「バチャマの贈りもの」

日時 2月19日(日) 13時30分～16時
(開場13時)

場所 講堂(先着450名)

※参加無料、申込不要

※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆展示場クイズ

「みんぱくQ アメリカ編」

期間 2月2日(木)～2月28日(火)

場所 アメリカ展示場

※要観覧料、申込不要

◆みんぱくセミナー

左のページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン
フォーラムの期間中は、特別シリーズとしてアメリカに関するお話をお届けします。詳細は本誌24ページをご覧ください。
※この他にもイベントを予定しています。お楽しみに！

国際シンポジウム

「エイジング——多彩な文化を生きる」

本シンポジウムでは、多文化状況や生活の激変を経験する高齢者のウェルビーイングを考へることを通じて、多様な文化的価値観・文化資源の共有に向けた具体的実践、地域生活者が共生環境を創出する意義と方途を議論します。

①セッションⅠ「文化多元社会における高齢者のウェルビーイング」

日時 2月25日(土) 13時～17時

会場 講堂(定員450名)

※参加無料、申込不要、日英同時通訳

②セッションⅡ「高齢者のウェルビーイング追求から生活の場の共有へ」

セッションⅢ「災害地における生活変動と高齢者ケア」

日時 2月26日(日) 9時30分～17時

会場 第4セミナー室

定員 80名(先着申込順)

※参加無料、要申込、日英同時通訳

申し込み方法等、詳細はホームページでご確認ください。

国際公開シンポジウム

「インクルーシブデザインとは何か
——ケアと育みの環境を目指して」

ケアや育みを効率的、効果的に進める環境を整えるためにインクルーシブデザインが果たす役割を考えます。インクルーシブデザインとは、多様な存在を包摂する社会を実現するためのヨーロッパ発のデザインコンセプトです。

日時 3月3日 13時～16時45分

会場 講堂(定員450名)

※参加無料、申込不要、同時通訳なし

みんぱく公開講演会

「ヨーロッパと日本の宗教——問いなおされる救済のかたち」

今回の講演会では、現代ヨーロッパでのキリスト教の信仰のありかた、アジアの中にも日本人にとっての宗教観についてのお話を通して、宗教とはなにかについて考えることにします。

講演1「ヨーロッパにおけるキリスト教——地域・民族・生活の視点から」

新免光比呂(国立民族学博物館准教授)

講演2「日本人の宗教観——多元な共存を可能にする思想とは」

保坂俊司(中央大学教授)

日時 3月16日(金) 18時30分～20時45分

(開場17時30分)

会場 オールホール(大阪、梅田毎日新聞社ビル地下1階)

定員 400名(先着申込順)

※参加無料、要申込、手話通訳あり

※参加申込方法

「公開講演会参加」と明記の上、氏名・郵便番号・住所・電話番号・今後の講演会などの案内送付希望の有無を書いて、ハガキ、FAX、メールにて下記「研究協力係」までお申し込みください。

FAX 06・68778・8479

E-mail: koenkai@dc.minpaku.ac.jp

お問い合わせ先

研究協力課 研究協力係

電話 06・68778・8209

「ウメサオタオ展——未来を探検する知の道員」

みんぱくで開催された特別展「ウメサオタオ展——知的先覚者の軌跡」をバージョンアップしたもので、とくに「情報産業論」に関する展示が増えます。

会期 2月20日(月)まで

会場 日本科学未来館

東京都江東区青海2-3-6

電話 03・35770・9151(代表)

http://www.mirakanjst.go.jp/sp/umesaotadao/

●展示場新構築のお知らせ

ヨーロッパ展示とヒネオテーク、学習コーナー、本館展示場出入口付近が3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、展示場の一部が工事のため閉鎖されます。

閉鎖期間 3月14日(水)まで

*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

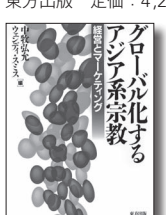
刊行物紹介

■小長谷有紀 著
『ウメサオタオと出あう』
——文明学者・梅棹忠夫入門』
小学館 定価：1,365円



この本は、昨年みんぱくで開催された「ウメサオタオ展」で入場者が「はっけんカード」に書き込んだ感想を紹介しながら、特別展実行委員長だった著者がウメサオタオの波及効果を読み解いており、梅棹忠夫の入門書となっている。

■中牧弘允、ウェンディ・スミス 編
『グローバル化するアジア系宗教——経営とマーケティング』
東方出版 定価：4,200円



本書は経営とマーケティングの視点から国境や地域を越えて教線を拡張するアジア系宗教を分析し、社会問題化した統一教会や法輪功の経営戦略を分析した論文など、新しい視点や情報を提供している。

みんぱくセミナー

第405回 2月18日(土)

会場 国立民族学博物館 講堂

時間 13時30分～15時(13時開場)

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第406回 3月17日(土)

文化とアイデンティティ——ビルマ／ミャンマーの今

講師 田村克己(国立民族学博物館教授)

講師 中牧弘允(国立民族学博物館教授)



みんぱくには1000点をこす世界各地のカレンダーが収集されています。そのなかからとくに現代宗教にかかわるものを取り出し、その意味を文化的・文明的に理解し、世界の動きのなかでどのような役割をはたしているかをかんがえます。カレンダーは身近なアイテムですが、奥は意外に深いのです。

第406回 3月17日(土)

文化とアイデンティティ——ビルマ／ミャンマーの今

講師 田村克己(国立民族学博物館教授)

講師 中牧弘允(国立民族学博物館教授)



東南アジアのビルマ(現国名ミャンマー)は、新しい憲法の公布、総選挙を経て「民主化」と新しい国づくりに向けて一歩をふみ出しています。そのなかには、世界遺産へ登録申請など、国際社会へ加わりようとする動きもみられます。この国の今につき、さまざまな文化の動きを通して述べます。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室

定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第405回 3月3日(土) 14時～15時

世界のバスポート／バスポートの世界

講師 陳天璽(国立民族学博物館准教授)

バスポートはなぜ必要なのでしょう? 世界各地のさまざまな種類のバスポートの事例を通して、それぞれの保証内容や発行機関について、また、発行する側と所持し、使用する側の意識のずれなど、人ひとの帰属意識をめぐる思いについても考えてみます。

第406回 4月7日(土) 14時～15時

ベトナム北部山地における盆地民と山地民

講師 樫永真佐夫(国立民族学博物館准教授)

この地域では、土地の高低に応じて、言語や習慣の異なる民族がたがいに関わり合いながらすみわけてきました。たとえば盆地民の黒タイは機織りで有名ですが、サトと彼らがよぶ山地民たちがしばしば綿花を供給してきました。両者のふかいつながりについて、伝承なども紹介しながらお話します。

※当日はキットとよばれる織物をじつさいにご覧いただけます。

「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」関連親子ワークショップ
ひよつたんの楽器をつくろう——ホビのくらしとお天気

3月10日(土) 13時30分～15時30分

ホビの人たちのくらしやお祭りの話を聞いて、ひよつたんの楽器をつくります。展示場も見学します。

※要申込。材料費600円。お話を聞くだけの方は無料参加できます。

第80回民族学研修の旅

アドリア海交易のかがやき

——バルカンの民族・歴史を考える

2012年5月17日(木)～26日(土) 10日間

訪問先・ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、モンテネグロ、アルバニア

※お申込、お問い合わせは上記友の会まで

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

チョコレートに感謝の気持ちをこめて

2月のミュージアム・ショップでは、いろいろなチョコレートをお届けしました。人気のフェアトレード・チョコレート(10種類)をはじめ、スフーアの形をしたチョコや、お湯に溶かして楽しむホットチョコレートなど、世界中のいろいろなチョコレートがみなさまのご来店をお待ちしております。14日のバレンタインデーには、大好きな人やお世話になった人に感謝の気持ちをこめて、ちよつとかわつたチョコレートを贈ってみてはいかがでしょうか。もちろん、自分へのご褒美にも。



フェアトレードチョコレート
50グラム(7種類) 各280円(税込)
100グラム(3種類) 各560円(税込)

レジスタンスたちの記憶を伝える リヨンを立レジスタンス・強制移送史センター

ふくしま いさお
福島 勲 北九州市立大学准教授



センター入口と見学に訪れた子どもたち

レジスタンス活動の拠点リヨン

フランス中部のリヨンを市で、ロヌ川に程近いレジスタンス・強制移送史センターを訪れた。路面電車がのどかに走り、本を抱えた学生たちの姿が目につく平和で美しいこの町の真ん中に、なぜこうした施設があるのか。それは、一九四〇年の首都パリ陥落後、レジスタンスたちの抵抗拠点となったのが他ならぬこの町だったからである。なるほど、ロベール・ブレツソンの映画『抵抗』の舞台が、当時のリヨンを市に存在したモンリュック監獄だったのも偶然ではない。

無名の死者たちを展示する

採光のよい入口ホールから、冷たい壁に導かれて薄暗い通路を進むと、クリプト(地下聖堂)のような



レジスタンスのビラ。ドゴールの署名がある

空間に導かれる。レジスタンスは地下活動とよばれるくらいだから、この密閉感^{かな}は展示内容に適っている。スピーカーから流されるロンドンの「自由フランス」のラジオ放送、壁に貼られた扇動ビラ、巨大な印刷機は、レジスタンスの最たる武器が何であつたかを雄弁に語ってくれる。ただし、この部屋を光の部分とすれば、当然、影の部分がある。次の展示室では、逮捕され、処刑されたレジスタンスたちの写真が暗闇に

スポットライトで照らし出されている。彼らの名前とその生涯の簡潔な記述を読んでいると、レジスタンスという匿名の活動を支えていたのは、沈黙のうちに暗闇で死んでいった一人ひとりの個人であつたことを思い出さずにはいられない。

保存される記憶と場所

ところで、この展示施設に、博物館ではなく、センター(中心)という名称が与えられているのは、この施設の建物そのものが保存の対象だからである。実際、ここは、リヨンを制圧するゲシュタポの司令部が置かれ、所長のクラウス・バルビー

による名高い「尋問」がおこなわれていた現場なのである。当時の部屋や壁の一部は展示物として保存されているが、とりわけ、逮捕されたレジスタンスたちが仲間を売るか死を選ぶかを迫られた地下の拷問室には、聖遺物的な価値が与えられている。そこは施設内のもっとも聖なる場所として、くりぬいた天井にガラスがはめ込まれ、地上階から光が届くようにしてある。

拷問されることもなく外に出ると、目の前の広場には見学に来た子どもたちがもう集まっていた。いつもより地上が眩しく、賑やかに感じられた秋の日の午後だった。



内部の展示風景。暗闇のなかでレジスタンスの記憶が語り継がれる

みんぱく 私の逸品 タッチカービング(トキ)

標本番号 H0267806
地域 日本
受入年度 2009年

民博 民族文化研究部

ひろせ こうじろう
広瀬浩二郎

バードカービングとは、本物そっくりりに木を彫り彩色した鳥である。リアルさを追求する彫刻技法を競うことから、バードカービングは米国で発展した。もともとはネイティブ・アメリカンたちが狩猟用に使ったおとり(デコイ)にルーツをもち、そこにヨーロッパ系移民の木靴作りの技術などが加わり、アートとしてのバードカービングが生まれた。

日本における野鳥彫刻の第一人者・内山春雄氏は、米国で開かれるバードカービングの世界大会でも活躍する実力の持ち主である。一九九九年から佐渡でトキの人工繁殖が本格的に始まり、二〇〇八年に一〇〇羽を超えたところで、そのうちの一〇羽が試験放鳥された。内山さんが制作したデコイをトキの放鳥の傍に設置し、餌場への誘導を試みる実験がおこなわれている。バードカービングには、群で生活する鳥に安心感を与える効果があるようだ。狩猟目的のデコイが保護活動に転用されるのもおもしろい。

「本物らしさ」にこだわる内山さんは最近、見る鳥でなく、さわる鳥の研究にとり組んでいる。鳥を見ることができない視覚障害者にも野鳥の生態を知ってほしいという願いから、タッチカービングが考案された。鳥の繊細な足やくちばしには、さわっても壊れないようにピアノ線や金属棒を入れる工夫を施した。トキのタッチカービングは、日本の鳥を彫り続ける内山さんの代表作、さわる豊かさや奥深さを来館者に伝える逸品としてみんぱくに所蔵されることになった。

考えてみると、空を飛ぶ鳥には誰もさわることができない。タッチカービングは視覚障害者のみならず、健常者(見常者)にも鳥の存在を身近に感じてもらうための資料なのである。優しくさわってトキの生命の尊さを理解する。ゆっくりさわってトキの大きさや体の細部を確認する。「さわるトキ」は、博物館ならではの「ものとの対話」の楽しさを教えてくれる。



ネパール、シエルパの民家で 仏画と出会う

小林 繁樹
こばやし しげき

民博文化資源研究センター

ネパールのエベレスト街道沿いにある、チベット仏教を信仰する人びとがくらす集落を訪ねたことがある。日本の田舎にいろのかと錯覚を起こすような居心地を感じ滞っていたところ、民家のりっぱな仏間に遭遇し、仏画師たちの仕事に目を奪われた。

極彩色の曼荼羅の世界

今から二〇年前の一九九三年の夏、ネパールのヒマラヤ山岳地帯を旅したことがあった。その行程の最中、ソル地方のジュンベシという集落でのことである。

この地域はチベット系のシエルパの人びとがくらし、チベット仏教を信仰している。穏やかで物静かな人びととそれにふさわしい景観のたたずまいが気に入って、たった五日間だけではあったが逗留した。そして周囲を巡ったり、谷をあがった僧院を訪れたりして、内戦直前の緊迫した情勢など感じさせない、のどかな時を過ごしていた。

その日も、偶然、立ち寄った民家の二階の広々とした台所兼食堂で、バター茶をいただきながら雑談を交わしていた。そして、壁の一角を占める棚のなかのいくつもの大きな銅製の水入れや食器を眺めているうちに、向かいにある部屋の入口に気がついた。

家人に許しを得てのぞいてみると、部屋全体に広がる極彩色の曼荼羅の世界が目飛び込んできた。壁の一面には仏壇がしつらえてあって、やや小振りながら端整な仏像が安置されている。その左右には経文を置く棚もある。そして、三方の壁には仏画が隙間なく描かれている。正確にいえば、床から一メートル半弱ほどの高さから天井までの、これもおよそ一メートル半ほどの壁が、幾枚にも区切られた仏画でびっしり覆い尽くされているのである。その下は腰板が張っており、作りつけの長椅子が設けられている。肩や頭が当たる腰板の部分にも文様が施されている。そして天井には曼荼羅があり、梁や桁、柱の結合部にも絵や文様が描かれている。

じつにりっぱな仏間との遭遇であった。そしてその時、初めて、民家にもこうした仏間があることを知ったのだ。それまで、いくつもの民家で見えていた仏壇とは、まるで感覚が異なる。仏間という空間全体で、チベット仏教の宇宙観を表現しようとしているのだ。こうした空間構成は寺や僧院だけのものかと思ひこんでいたわたしには、新鮮で感動的であった。それから裕福な家には、それ相応の仏間をもっていることがわかってきた。

旅行記に書かれない民家のなか

ジュンベシは広く開けた盆地状の谷底に位置する集落で、標高は二七〇〇メートル、寺を中心にして、二、三階建ての民家が三〇戸ほど軒を連ねたり、点在したりしている。一六世紀ごろ、チベットからヤクを連れて移住してきたシエルパの人びとがもつとも古くから定着した村のひとつという。マツやシャクナゲの森林やイネ科の草地を切り開いて、オオムギ、コムギや、ジャガイモ、トウモロコシなどを栽培し、ヤクなどを飼育している。

ヒマラヤ山麓の自然や人びとのくらしは、オセアニアの島嶼部をフィールドにしてきたわたしにとって、やはり、随分、異なってみえた。けれど、思いのほか日本と似ており、滞在中は、日本の田舎にいろような錯覚さえ覚えるほどであった。また、ジリから入るエベレスト街道沿いにある集落だから、トレッカー対応の宿もある。だからか、それなりに旅行者や外国人に慣れているようで、構えることもなく過ごすことができる。

それでも、ジュンベシやこの周辺での旅行記に、民家の見事な仏間の記事が見受けられないのはなぜだろう。トレッカーは山行にいそしんで、民家を美しい風景のひとつとしてとらえてしまい、そこに住む人びとのくらしにまで関心をいだく余裕がないのだろうか。

別の日には、仏画師の家を訪ねることもできた。自宅の簡素な寝台に座り、仏画を描いている。諸仏には儀軌（規定）に則った図像があり、仏画師は師匠からいただいたり、自分で描いた粉本（手本）をもつていて、それを基に描くのだという。ある仏画師の家では、粉本を見せてもらい、幾枚かを譲ってもらいもした。チベット和紙に朱で幾何学的な計測線を引き、そこに諸仏を墨の実線で描いている。宝島の地図を発見したような思いで、これにも目を見張った。あの仏間の諸仏も、すべてがこうして描かれているのである。

計測線が入った図像の数々は、今ではネパールの短い旅と仏画師の方々との絆を示すわたしの大切な証であり、度量衡を考える際の契機となり続けている。



儀軌に則った描画法に基づいて仏画を描く



ジュンベシの中心地周辺。古い家並みも残っている



壁一面に仏画が描かれている民家の仏間



綴（と）じられた粉本帳。所々に修正が施されている



ヒマラヤ山麓のソル地方、ジュンベシの遠景



「商い」とは、ものやサービスの代償としてお金をとる経済活動だ。しかし、手にしたお金の使い道は人それぞれ、自らの財をなす「商い」もあれば、それを人や社会に還元させる「商い」もある。日本と心をともにすべく集った、フランスの菓子職人たちが示す「商い」のかたちを紹介する。

菓子職人、集結する

二〇一一年三月一日。日本と八時間の時差があるパリで、大震災のニュースを知ったのは、仕事の最中でした。インターネットで日本から配信される、現実の世界とは思えない状況を目の当たりにし、約一万キロも離れたパリにすることを、これほどでもどかしく思ったことはありません。パティシエール（菓子職人）のわたしにできるのは、被災者の方々に、甘くておいしいお菓子を届けることではないか？ しかし、日本まで足は運べない。それなら、お菓子を作ってフランスで販売して、「お金」を集めよう。そう考えて、早速、友人の食ジャーナリストの千秋さん、フランス在住日本人菓子職人の協会 Le Pont des Artisans のアントニさんに相談し、すぐに賛同をえました。友人の一人、夕子さんが、わたしたちのグループに名前とロゴを与えてくれました。Labo Love Japon (以下 L L J)。

集まりました。

いよいよ当日です。慣れない販売作業でしたが、会場の外まで行列ができるほどの大盛況で、予定の一時半前の完売でした。総収益は五四五九ユーロ（約六二万円）にのぼり、予想以上の成果に一同驚かされました。これを皮切りに震災者支援のチャリティー販売が続きました。

四月上旬には、衣服や写真の展示会のオープニングや天理日仏文化会館の一部を借りての販売があり、四月下旬には、震災後に結成された、ファッション関係のパリ在住日本人グループ Hope & Love for Japan が主催するチャリティーバザーにも参加しました。最高三時間の入場待ちという盛況ぶりでした。このときから、紙の彫刻家の Shoko さんが、スタンドのデコレーションを担当してくれることになりました。

そして五月には、パリ10区での地区活性化イベント、六月には、芸術を通じて被災地支援をおこなっている団体 Japonaide にさそわれ、パリ2区のアークードでのイベントで販売する機会をえました。そして七月には、子ども服や子ども用品の展示会 Playtime に、チャリティーショップが設置されました。同展がおこなわれたニューヨークや東京でもチャリティーがおこなわれ、わたしたちが作ったオリジナルのクッキーも海を渡りました。

夏のバカンスの終了後は、スイートのイベントとしては世界最大級ともいえるチョコレートの展示会 Salon du Chocolat への参加です。期間中は、メインスタージで L L J の活動を紹介する機会にも

「Labo」は厨房を意味する「Laboratoire」から。要するに厨房で働くみんなは日本が大好き！「厨房から日本に愛をこめて」ということです。

次々に広がる支援の輪

すぐに、チャリティー販売をおこなう会場探しをスタートし、パリの日仏文化センター Espace Japon で三月二六日の開催が決定しました。菓子提供の依頼、参加表明者との調整、情報のまとめリストやロゴの作成など、L L J のなかに自然と役割分担ができ、次々と計画が進んでいきました。宣伝活動、お菓子を作る場所と材料の提供などの面で、メンバーが幅広い人脈や職場の協力によって計画を進めました。販売の前々日に、有志の手でお菓子をラッピングし、ようやく前日に友人の車で会場に納品しました。なかには、会場に直接お菓子を送ってくれた人もおり、みんなの熱い気持ち

恵まれ、L L J のロゴ入りパッケージの板チョコを提供してくれたボナさんも登壇しました。自身の店を東京にもつボナさんは、日本での震災体験について語り、みんなが被災者への思いをあらたにしました。また、L L J は「和素材で日本を支援」と題した講演もおこない、フランスと日本の製菓業界の強い結びつき、そして何よりも懸念されている、日本からの輸入食材の安全性について説明しました。こうして、五日間であつまった約一万七〇〇〇ユーロ（約一八〇万円）のお金は、日本洋菓子協会連合会とおし、被災地の製菓業界再建に役立ててもらうことになりました。

目的にふさわしく「商う」

「商い」は、「もの（目に見えないものでも）」を販売し、その代償に「お金」をいただくこと。わたしたち L L J は、この「商い」をおし、えた「お金」で日本への支援をおこないました。わたしのフランス人同僚がいました。「これが日本人の精神なのねえ。あれだけの災害。みんな、何もなくても募金するわよ。でも、治代は、ただお金だけ受け取るのよ、気が引けるのよね」と。わたしの気持ちはすっかり見抜かれていました。

L L J は今後、A S F J A (日仏食文化交流の会) の傘下として、より目的を絞った支援を続けていきます。もちろん、おいしくて、心あたままるお菓子を手に……。

I love Japan のメッセージクッキー



L L J メンバーの集合写真



真剣なまなざしでお菓子を選ぶフランス人 (Hope & Love for Japan が主催するチャリティーバザーにて)

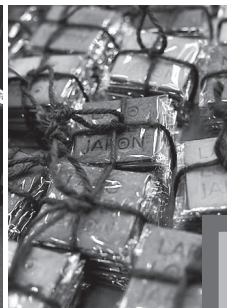


初めての販売 (Espace Japonにて)



歩道にチョークで記した宣伝文句。「日本のためのお菓子販売」

目玉商品 L L J クッキー



L L J のロゴ



心をこめて作られたお菓子たち

春の到来

中国では、「新年」といえば春節を示す。新しい年を迎えると同時に、春の到来をも喜ぶこの日は、盛大に、晴れやかに、中国を彩る祝日だ。暦や文化が異なるうとも、新年を喜び、家族のその一年の安泰と発展を願う心は、いずれも同じにちがいない。中国や世界各地の華人コミュニティがもっとも華やぐ一日を紹介する。

正月休みの後にまた正月

お正月のにぎわいがひと段落し、「正月ほけで……」と言い訳することができなくなるころ、華人たちのあいだでは、「そろそろ……」と新年の準備が本格的に始まる。春節（しゅんせつ）だ。春節とは陰暦（旧暦）の新年で、中国ではもちろんのこと、華人たちが暮らしている世界各地のコミュニティは、この時期になると赤や金を基調とした飾り物で華やかになる。

春節は陰暦の祝日であるため、年によっては陽暦（新暦）の二月になることも、二月になることもある。今年の春節は、陽暦の一月三日、しかも龍年だ。皇帝の象徴でもご存知の

とおり、龍は吉祥を呼ぶ神獣として華人にこよなく愛されている。きつと今ごろ、今年一年の安泰と発展を願って、チャイナタウンでは「昇り龍」が姿をあらわしているに違いない。

春節の願掛け

華人たちは春節になると、「拜年」といって親戚友人のところへ新年の挨拶に赴く。その際、子どもたちが楽しみにするのは「紅包」、つまりお年玉だ。通常、紅包という赤いお年玉袋には金箔で送り主の苗字が記されていたり、さらびやかな中国の年画が印刷されていたりする。芳しい香りのするものもある。

華人の家のなかにも、新しい一年の幸福を願って玄関の両脇やドアなどに新しい「春聯」や年画が貼られる。最近、市販されている春聯は赤い紙に金箔で印字されたものが多いが、自家で書くこともある。幼いころ、我が家では父が毎年春聯を書いてくれた。なかでも、財宝を招き入れることを意味する「招财進寶」の四文字の辺やつくりを合体させ一文字に似せて書かれた字に、幼かったわたしは深く感動し自分も真似て書いた。書きながら新しい一年への期待が膨らんだのを今でも覚えている。また、春聯で必ず用意される「春」や「福」の字だが、文字を上下逆さにして貼られることが多い。それは、中国語（北京語）で逆さを意味する「倒」と

複数の暦の文化を楽しむ

華人の暮らしには、いつもふたつの暦に基づく文化が息づいている。ひとつは陽暦の暮らし。太陽暦（グレゴリオ暦）を基にしている日本でもおなじみの時間だ。もうひとつは、陰暦の暮らし。太陰太陽暦で、月の満ち欠けと二十四節気が組み合わさった暦だ。中国は元来、農業社会であり、人びとは農産物の生産過程のなかで、少しずつ季節と気候の変化の規律を把握し、それに合わせて暦を作った。そのため、陰暦は農暦ともよばれている。香港や東南アジアなど華人の多い地域は、西洋の植民地を経験してきたため、陽暦に基づいたイベントと陰暦に基づいた中国の歳時の両方を生活にとり入れている。たとえば、東南アジアのデパートの大きなモニュメントは、陽暦のクリスマスにサンタクロースが飾られるが、一月二六日になると、財神爺（財産の守り神）に衣替えをし春節モードになる。

春節になると、街では爆竹が鳴り響き、龍や獅子が練り歩く。こんな春節のにぎわいを、日本のチャイナタウンにも定着させようと街の店主などが集まり「春節祭」が考案された。横浜中華街では一九八六年から、そして翌一九八七年は神戸南京町でも、街をあげて春節を祝うようになった。日本に暮らす華人たちは、会社や学校など陽暦に従った生活をしている人が多いが、春節だからといって休むことはせず、家族集まって食事をするくらいだった。ましてや今のよう



サンタクロースの体に財神爺の顔の巨大モニュメント（シンガポールにて）

に中国の伝統芸能を披露し、にぎやかに祝う雰囲気はなかった。しかし、街をあげて祝うようになってからは、メディアなどにも紹介され、今では、多くの観光客を呼び寄せるチャイナタウンの冬の風物詩となっている。その結果、華人はもちろん、日本人たちも春節を楽しむようになり、陰暦をとおして異文化理解が深まっている。あなたも、来年の春節には近くのチャイナタウンへ出かけ、なにか願掛けをしてみたいか？



春節に獅子舞をする子どもたち（横浜中華街にて）

スワヒリ語をしゃべる人びと

鈴木英明
日本学術振興会特別研究員

交易言語スワヒリ語

スワヒリ語は東アフリカの港町の商業活動が育んできた言語だ。インド洋のあちこちの言語の語彙が豊富に含まれている。そんなスワヒリ語は、さまざまな人やモノ、情報が混交する世界としてインド洋海域世界をとらえる僕にとって、このうえなく関心を引く存在だ。ただ、そういつてはみるものの、アフリカ大陸の外ではほとんど使われることのない言語なのだろうと、どこかでそう思っていた。

ムカッラーでおじさんに出会う

二〇〇九年の夏のある朝、僕はイエメンのムカッラーの町中を歩いていた。滋賀県立大学の山根周先生のインド洋港湾調査に参加させてもらっていたのだ。参加者全員で手わけしての悉皆調査の一環で、メモをとりながら担当する区画の建造物をひとつひとつみていく。朝の早いうちだったので、こういう調査をしているといつも気になる人目を気にすることなく調査ははかどった。担当区画を歩き終えたころ、なんとなく視線を感じた。振り



アラビア湾に面したムカッラーの港は天然の良港

返れば、クーファイヤ（通常、男性が頭に巻く布）を肩にかけてた恰幅の良いおじさんが後ろからメモを覗きこんでいる。他愛もない挨拶を二、三言い交わすと「どうだ、コーヒーでも飲まないか」とおじさんが誘う。僕は近くの露店のコーヒー屋に案内された。

らは、ザンジバルやモンバサにむかし住んでいた、いまでも住んでいた、出稼ぎでタンザニアの内陸部から来ていたり、早い話がスワヒリ語をしゃべる人たちだったのだ。おじさんたちはなんとなく朝の時間帯にぼつりぼつりとこの空き地に集まってきては話に花を咲かせるのだそうだ。気の向くまま、ときにスワヒリ語、ときにアラビア語で話は続く。

人とともに言語が行き交う

ムカッラーでの出会いと前後して、マダガ



ムカッラーの街角でスワヒリ語に出会う

スカル北西部のヌシ・ベ島やインド北西部のカッチ地方の港町でもスワヒリ語に出くわした。ヌシ・ベ島で僕が訪ねた村について色々調べていくと、そこはかつてこの島最大の交易港であったことがわかった。カッチ地方で出会った老人たちは、ザンジバルやモンバサ、オマーンなどで長年商いをしてきた人たちだ。彼らは気分次第でスワヒリ語を用いてむかしを懐かしんでみたり、ときにはスワヒリ語で秘密の話をしたりする。

インド洋の歴史を勉強していて一番難しい問題のひとつに、当時の人びとがどうやってコミュニケーションを図っていたのかという問題がある。ありふれたことにかぎって人は記録に残さない。そうしたコミュニケーションの道具として「海洋アラビア語」の存在を指摘する研究者もいる。けれども、インド洋各地を歩くうちに、スワヒリ語も案外、広く用いられていたのかもしれないと思うようになった。資料をよく読み返してみると、ザンジバル島に丁子や象牙を求めてやってきた一九世紀の欧米の商人たちがスワヒリ語を習得していたり、この言語が東アフリカの港町を越えて用いられていたことが断片的にわかってきた。

インド洋を行き交う人びとは往々にして多言語話者だ。ある人の頭のなかに幾つもの言語が搭載されていて、そのうちのどれかが別

おじさん、スワヒリ語でしゃべりだす

話を聞いていると、次第に引き込まれていく。僕にとって彼はまさに「ナマ」の資料だった。というのは、おじさんの一家は船乗りの家系で、彼自身も最初はダウ船で、そのあとはタンカーなどで東アフリカに随分と通ったのだという。一時はケニア随一の港町モンバサに居を構えていたらしい。ためしに僕は、「モンバサには何年くらい住んでいたんですか」とスワヒリ語で尋ねてみた。「一五年くらいかな」。おじさんは驚くわけでもなく、僕たちの使用言語は滑らかにアラビア語からスワヒリ語へと移行していった。

そうこうしているうちに、おじさんが時計を気にしだした。そうそう暇ではないらしい。ならば失礼しようかと思っていると、おじさんが隣の友だちの所に行くから来るかと聞いてきた。

隣の友だちはビルの狭間の空き地に腰かけていた。そこに着くまでのあいだ、一生懸命、アラビア語会話の例文を思い起こしていたけれど、それはあまり意味がなかった。彼



僕が訪ねた村はかつてヌシ・ベ島随一の国際港だった

の人の頭のなかの同じ言語と繋がりが合う。そんな言語のひとつにスワヒリ語があったのではないか。そして、ある言語のネットワークがインド洋に生きる人びとを繋ぐのと同時に、別の言語のネットワークもまた海を越える。そんなふうにして考えてみると、インド洋海域世界の多様な交流の根幹にあるコミュニケーションの在り方がよりクリアな輪郭で立ちあらわれてくる。僕はワールドと文献のなかを行ったり来たりしながら、そんなことを考えている。

2月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、
話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

※「たっぷりアメリカ——春のみんなくフォーラム 2012」期間中はアメリカに関するお話をお届けします。

5日
(110日)

時間：14時30分から15時30分
話者：関雄二（国立民族学博物館 教授）
話題：古代文明を掘る
場所：本館展示場内ナビひろば

12日
(110日)

時間：15時30分から16時30分
話者：鈴木紀（国立民族学博物館 准教授）
話題：メキシコの木彫アレブリヘ
場所：本館展示場内ナビひろば

19日
(110日)

時間：11時から12時
話者：中牧弘允（国立民族学博物館 教授）
話題：カーニバルでつながるブラジルと日本
場所：アメリカ展示場

26日
(110日)

時間：14時30分から15時30分
話者：藤井龍彦（国立民族学博物館 名誉教授）
話題：アンデスの箱形祭壇
場所：アメリカ展示場

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

編集後記

異常に周期のながい、ゆるやかな横揺れを足元に感じ、研究室で作業をしていたそれぞれが何事かと廊下にとびだした。自分の眩暈か、錯覚か確かめようとした人もいたようだ。まもなく地震があったという速報が入り、事務室の隣部屋のテレビをつけるとすでいくつかのテレビ局は津波警報をくりかえし、東北の海岸線の映像を流し始めていた。いつもどおり何事もなだらうとタカをくくっていたわたしをふくめ、やがて画面での大惨事を目にしながら、なすすべもなく時を過ごすことになった。以来、ほぼ1年のあいだ、それぞれ、さまざまな思いでその情景を反芻し続けてきたに違いない。民博では、文化人類学的視点からの震災被害や記憶保存のデータベース作り、文化財復元の支援、被災地域復興の国際比較などいくつかのプロジェクトが進行しつつあるほか、被災体験などの聞き取り調査を続ける研究者も少なくない。3月11日を1カ月後にひかえ、研究者として、同じ日本の住民として、そして人として何ができるのか、震災がわれわれに突きつけた問題をあらためて問いなおしてみたい。(庄司博史)

●表紙：NPOの協力によりやっと完成した集会所で、つかの間の餅つきを楽しむ。(撮影・鎌澤久也)

次号の予告

特集

複製・復元・再現

月刊みんなく 2012年2月号

第36巻第2号通巻第413号 2012年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史(編集長) 樫永真佐夫 川口幸也

久保正敏 菅瀬晶子 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敦

制作・協力 財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

